

Title	場の構造と感情：絶対感情判断の相対性と恒常性
Sub Title	
Author	横山, 松三郎(Yokoyama, Matsusaburo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1940
Jtitle	哲學 No.21/22 (1940. 7) ,p.445- 465
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川合博士古稀記念特輯
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000021-0445">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000021-0445</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 場の構造と感情

(絶對感情判斷の相對性と恒常性)

横山松三郎

## 前 詞

對象の知覺が周圍の場の構造や布置によつて影響せらるゝ事は一般に知られてゐる處であるが、感情も亦精神過程の一つの方面を形成してゐる限り、かゝる法則の支配を免れる事は出来ないであらう。然るに、場と感情との關係についての組織的研究は其數未寥々たるものであつて、僅かに Bebe-Center, Harris<sup>(1)</sup>等の報告を挙げ得るに過ぎない。本研究は一、場を一定方向に變化せしむる時、感情もそれに對應して變化するか否か、二、場を一定に保つ時、感情も恒常を保つものであるか否か、といふ二個の問題を説明しようとする。本篇の梗概は既に第六回及び第七回

日本心理學會大會に於て講演し、一部は「心理學論文集」並に「心理學研究」に掲載されてゐるが、今之等を増補訂正して川合先生に獻げ、聊か祝賀の微意を表し度いと思ふ。

註

(一) 輪廓線効果とか幾何學的錯視といはれてゐる現象の多くはこの範疇に屬する錯覺である。最近、Ponzoは點で畫かれた二本の並行垂線を角で圍むだ場合、角の奥にある線が前方にある線よりも長く見える事を指摘した。M. Ponzo, *Arch. ges. Psychol.*, 65, 1928, 129. 本塾研究室に於ても増井學士が角の大きさを種々變更してPonzoの圖形の研究を行つたが、其結果は「心理學研究」第五卷第二輯に發表される筈である。時間知覺の領域に於ても同様の研究がある。Woodrowに依れば、一定の短い時間間隔を二音で區切る場合、初めの音或は後の音或は兩者の長さを長くする時間隔は普通の時よりも長く知覺される、但し、初めの音を長くした時が一番効果が大きいといはれる。H. Woodrow, *Jour. Exp. Psychol.*, 11, 1928, 167—193.

(II) J. G. Beebe-Center, *Amer. Jour. Psychol.*, 41, 1929, 54—69; A. J. Harris, *Amer. Jour. Psychol.*, 41, 1929, 617—624.

(三) 横山松三郎、心理學論文集Ⅶ、二八六—二九〇（此論文中の第一表Hの欄にて四列目の數字1.0.70は10.70の誤植である）

(四) 横山松三郎、心理學研究 第十四卷、三六一—三七。

## 一、絶對感情判断の相對性について

此處で絶對判断といふのは、近頃精神物理學的研究に屢々用ひられる一種の恒常法、即ち絶對判断法に於て行はれるやうな判断を指すのである。

絶對判断法は普通の恒常法の如く標準刺戟と比較刺戟との比較判断を要求しない。刺戟は一個づつ繼時的に與へられ、觀察者はその各々の一定様相について直接判断するのである。此理由によつてその判断は絶對判断と呼ばれてゐるのであるが、併し本質的に絶對的であるかどうかは疑はしい。といふのは既に *Wer*、*ver* 及び *Zener* が指摘したやうに、此方法に於て、觀察者は系列中の刺戟を一つ一つ獨立したものととして判断するのではなく、常に全體の一員として全體との關係に於て判断するからである。即ち、觀察者は實驗の進行につれ、刺戟系列に關する一般概念を構成し——之は普通の場合心構へによつて代表される——、之を基底として個々の刺戟を判断して行くのであつて、結局、其處に行はれる判断は相對的と見られるのである。

ある刺戟系列中の一つの刺戟に對する「絶對判断」が、それに先行する同系列のすべての刺戟によつて影響される事は諸家の研究に明らかであるが、筆者も亦先年感情對比の研究に於てこの事實を確認した。あまり快でも不快でもない刺戟——試験刺戟——を快刺戟と組合せて一つの系列を作り、他方不快刺戟と組合せていま一つの系列を作り、絶對判断法によつて實驗した處、試験刺戟の感情値は前者に於けるよりも後者に於ける方が大なる事を發見したのである。筆者はこの事實を基礎として、「一つの時間的集團を形成する刺戟系列に屬する任意の一員の感情値はそれに先行する全員の感情値の總和に反比例する」といふ Beebe-Carter 氏の法則の妥當なる事を論じたのであるが、併し此實驗の目的は感情に於ける對比的効果の有無を吟味する事であり、從て極めて偏つた刺戟の組合せ方を採用した爲、その結果を以て直に該法則の一般的證明と看做す譯には行かない。蓋し、系列内の刺戟の配置を變更する事によつて異なる結果を招來しないとも限らないからである。以下、報告しようとする研究は此缺陷を補はんとして計畫され實施された實驗の一部を構成するものである。實驗の装置及び一般手續きは前の場合と大

體同様であるから精しい記述は省略し、只異つてゐる點だけを記して置く事にした。

### 色彩刺戟による實驗

**予備實驗** 六十八種の色紙を、各々七糎平方に切り、縦十五糎、横二十三・五糎の臺紙に貼り一枚づゝ、出鱈目の順序によつて灰色の衝立の中央に穿たれた六糎平方の露出孔から約四秒間觀察者に呈示して、その各々について快不快の判断を下さしめ、その結果に基いて本實驗に適用すべき刺戟材料として各觀察者に對し色彩五十種づつ選んだ。その中には快なるもの、不快なるもの、快でも不快でもないものが含まれてゐるが、その割合は觀察者によつて異なる。

**實驗一** 此實驗に用ひられた刺戟系列は予備實驗に於て選定された五十種の色彩から成立つてゐる。實驗方法はすべて予備實驗に準ずる。但し此場合觀察者は次の様な符號によつて感情値を報告する事を要求された。+<sup>3</sup>(非常に快)、+<sup>2</sup>(相當に快)、+<sup>1</sup>(稍々快)、0(快でも不快でもない)、-<sup>1</sup>(稍々不快)、-<sup>2</sup>(相當に不快)、-<sup>3</sup>(非常に不快)。實驗は三回繰返して行はれた。第一回目に於ける刺戟の露出順序は全く出鱈目

であつたが、第二回目はその逆の順序により、第三回目は第一回目の順序に従つた。

**實驗二** 此實驗は實驗一の結果に基き、各觀察者に對し五十の刺戟を、得點順に配列し、最後の順位にある廿、即ち第三十一位から第五十位までの刺戟を除き、殘餘の比較的快なる刺戟三十個について實驗一と同一の方法によつて施行された。

**實驗三** 方法は實驗一と全く同一であるが、此實驗は五十の刺戟の中第一位から第二十位までの刺戟を除き、殘餘の比較的に不快な刺戟三十個について行つたものである。

實驗はすべて暗室内に於て行はれた。觀察者は顔面固定器にて顔を固定し、約六六糎を巨てて露出孔に對する。觀察者の背後約五〇糎、頭上約二〇糎の處に左右約五〇糎の間隔を置いて取付けられた二個の 100 V. 50 W. C 型 ヲツダ 晝光觸が刺戟面の照明に供された。

觀察者は四名あつたが、中 Ka 及び H の二名には一、二、三、N 及び Ki には一、三、二の順序で實驗した。實驗に要した時間は一、二、三共各一時間(三系列)づつであり、一實驗時と次の實驗時との間隔は一週間である。

## 音刺戟による實驗

豫備實驗　 $\phi$ から $\phi$ まで半音置きに一音をとり全部で十三音を選び、之等を二個づゝ組合せて七十八種の複合音を作り、一つづゝ出鱈目の順序によつて與へ、その快不快を判斷せしめ各觀察者に對し五十の複合音を選定して本實驗の刺戟材料とした。

本實驗　實驗の手續きは色彩の場合と全く同様である。即ち、實驗一に於ては五十の複合音を型の如く一つづゝ與へて各々の感情値を判斷せしめ、その順位を決定する。實驗二は一に於て第一位から第三十位までの順位を得た三十の複合音の感情値を決定し、實驗三は、同じく第二十一位から第五十位までのものについて判斷せしめた。

音源にはハーモニウムを用ひ、一複合音の刺戟時間は四秒とした。觀察者は音源から約一五〇糎離れ、音源に背を向けて安座し、一つ一つの刺戟の快不快を<sup>3</sup>から<sup>3</sup>までの符號によつて報告して行つたのである。參加した二名の觀察者の中、一名( $T_0$ )には實驗一、二、三、他の一名( $T_a$ )には一、三、二の順序で實驗した。所要時間は一、



二、三共各一時間(三系列)、一實驗時と次の實驗時との間隔は一週間である。  
**實驗の結果** 結果は表Ⅰ及びⅡに要約してある。今、表Ⅰの觀察者Kaの欄によ

表Ⅰ 各實驗に於ける平均感情値(色彩刺戟)

實驗	觀察者		Ka	H	N	Ki
	刺戟					
一	1—50		+0.96	+0.20	-0.06	+0.02
	1—30		+1.65	+1.23	+1.07	+0.78
	21—50		+0.18	-0.93	-1.08	-0.80
二	1—30		+1.03	+0.70	+0.07	+0.12
	21—30		+0.15	-0.15	-1.05	-0.55
三	21—50		+0.73	+0.27	-0.75	+0.27
	21—30		+1.10	+1.05	+0.15	+1.15

表Ⅱ 各實驗に於ける平均感情値(音刺戟)

實驗	觀察者		To	Ta
	刺戟			
一	1—50		+0.25	+0.08
	1—30		+0.97	+0.65
	21—50		-0.37	-1.03
二	1—30		-0.07	+0.40
	21—30		-0.30	-0.60
三	21—50		+0.25	-0.05
	21—30		+1.25	+0.15

つて説明すれば、第一列の數字 +0.96 は實驗一に於ける全部の刺戟即ち第一位から第三十五位までの刺戟の感情値の平均であり、第二列の +1.65 は第一位から第三

十位まで、また、第三列の  $+0.18$  は第二十一位から五十位までの感情値の平均である。次に、第四列の  $+1.03$  は実験二に於ける全部の刺戟三十個——之は実験一の第一位から第三十位までの刺戟と共通する——の感情値の平均であり、第五列の  $+0.15$  は同じ実験に於て用ひられた刺戟の中、実験三の刺戟と共通するもの十個——之は実験一に於て第二十一位から第三十位までの順位を占めた刺戟と同一である——の感情値の平均である。更に第六列の  $+0.73$  は実験三に於ける全部の刺戟三十個——之は実験一の第二十一位から第五十位までの刺戟と共通する——の感情値の平均であり、第七列の  $+1.10$  は同じ実験に用ひられた刺戟の中、実験二の刺戟と共通な十個の刺戟の感情値の平均である。以下、之に準ずる。

一見して明らかなるやうに、全観察者を通じて実験一に於ける第一位から第三十位までの刺戟の感情値の平均は、実験二に於ける、これと全く同一の刺戟の感情値の平均よりも高く、其差は色彩刺戟の場合各 Ka  $0.62$ , H  $0.53$ , N  $1.00$ , Ki  $0.66$ 、全観察者の平均  $0.70$ 、音刺戟の場合各 To  $1.04$ , Ta  $0.25$ 、兩者の平均  $0.65$  となる。〔表Ⅰ及びⅡの実験一(1—30)列、実験二(1—30)列参照〕之に反して、実験三に於ける全刺戟の感情値の平均は、実験一に於ける

る、これと全く同一の刺戟のそれよりも高く、其差は色彩の場合 Ka 0.55、H 1.20、N 0.33、Ki 1.07、全観察者の平均 0.79、音の場合 To 0.62、Ta 0.98、兩者の平均 0.80 を算する。〔表 I 及び II の實驗一 (21—50) 列、實驗三 (21—50) 列参照、また、實驗二と三とに共通な刺戟十個の感情値の平均も後者に於ける方が遙に高く、其差は色彩の場合 Ka 0.95、H 1.20、N 1.20、Ki 1.70、全観察者の平均 1.26、音の場合 To 1.55、Ta 0.75、兩者の平均 1.15 となる。〔表 I 及び II の實驗二 (21—50) 列、實驗三 (21—50) 列参照〕

更にこの感情値の動搖を刺戟の數について見るに表 III 及び IV の如くなる。

表 III

各實驗間に於ける感情値の動搖と刺戟數 (色彩刺戟)

實 驗	感情値	觀察者			
		Ka	H	N	Ki
I : II (30)	+	3	5	3	9
	=	8	7	3	6
	-	19	18	24	15
I : III (30)	+	19	27	17	22
	=	5	0	7	0
	-	6	3	6	8
II : III (10)	+	9	10	8	10
	=	1	0	1	0
	-	0	0	1	0

表 IV

各實驗間に於ける感情値の動搖と刺戟數 (音刺戟)

實 驗	感情値	觀察者	
		To	Ta
I...II (30)	+	2	7
	=	3	10
	-	25	13
I : III (30)	+	21	22
	=	7	6
	-	2	2
II : III (10)	+	9	7
	=	1	3
	-	0	0

之等の表は共に同じ形式に作られてゐるが、例へば表ⅢのKaの欄にて一：二(30)の十の列に於ける3は實驗一と二の共通刺戟三十個の中、二に於て一に於けるよりも高い感情値が與へられた刺戟の數、=の列の8は等しい感情値が與へられた數、而して一の列の19は低い感情値が與へられた數を表はすものである。

今、全觀察者の結果を概括していへば、實驗一と二の共通刺戟三十個の中、平均十九個即ち六三%は一に於けるよりは二に於て低く評價されてゐ、實驗一と三の共通刺戟三十個の中、平均二十一個即ち七〇%は三に於ける方が一に於けるよりも高く評價されてゐる。最後に十個の共通刺戟の中、平均九個即ち九〇%まで實驗三に於て實驗二に於けるよりも遙に高く評價されてゐる。

要するに或る一定の感情値を持つ刺戟系列より、比較的に高き感情値を持つ刺戟を取除けば、殘餘の刺戟の感情値は一般に高められ、之に反して、比較的に低き感情値を持つ刺戟を取除けば、殘餘の刺戟の感情値は低められるといふ事になる。而して、之は最初に述べた「一つの時間的集團を形成する刺戟系列に屬する任意の一員の感情値はそれに先行する全員の感情値の總和に反比例する」といふ法則の

妥當なる事を裏書するものである。即ち、一定刺戟の相關者としての感情は該刺戟に對して絶對的恒常關係を有するものではなく、刺戟の効果はそれが與へられる場の構造如何によつて變化し、かくして其處に結果する感情は場と對比的關係にたつといはねばならない。

註

(一) E. G. Wever and K. E. Zener, *Psychol. Rev.*, 35, 1928, 466.

(二) S. R. Truman and E. G. Wever, *Univ. Calif. Publ. Psychol.*, 3, 1928, 215.

Cf. also Beebe-Center, *op. cit.* and Harris, *op. cit.* 此外 J. Volkmann の研究があるが公刊はされてゐない。

(三) 横山松三郎、川合教授還曆記念論文集二一七一—二三四。

## 二、絶對感情判断の恒常性について

感性的經驗の精神物理學的研究に於ては、例へば、刺戟閾、辨別閾等の測定に於て、其處に適用せらるゝ方法が全系列法であらうが、最小變化法であらうが、或はまた恒常法であらうが、同一の刺戟に對して少くとも數回乃至數十回、或はある特殊の

場合には百回以上の判断を得、その結果を適當な數學的手段によつて處理して、代表値を決定する事が一般の慣例となつてゐるやうである。

然るに、感情方面の數量的研究に於ては、例へば、絶對判断法または一對比較法によつて一群の刺激の感情値を測定する場合、單に一二回の判断を以て之を決定しようとする傾向が少くない。之は恐らく感情が間歇的に與へらるゝ刺激に對しても順應しがちであるといふ一般的通念に基いた習慣と考へられるが、併しかゝる觀念の眞偽に關しては尙未検討せらる可き問題が残されてゐるばかりではなく、一二回の觀察によつて測定値を決定する事それ自體が科學的方法として一層吟味を要する問題であらう。<sup>二〇</sup>

勿論、純理論的立場から見れば、唯單に觀察の回數を多くしても無意味である。回數を重ねて得る處のものは結局平均値であり、平均は眞の測定値ではなくてその中心的傾向を示すに過ぎない。若し觀察の全ての條件——全體の場——が明確に規定されてゐるならば僅か一回の觀察で十分である、といふやうな議論も成立する譯である。併し實際問題として、研究の目的の爲に準備されたすべての條

件が純一に保たれたか否かを正確に知る事は殆ど不可能に近い程困難である。此處に實驗家の悩みがあり觀察を繰返す事の必要が容認せらるゝのである。

本研究は同一の刺戟系列を一定の時間的間隔を置いて繰返へし呈示して、その各々に對する絶對感情判斷の恒常度を見ようとする。即ち、刺戟の場を一定に保つた時、感情値も恒常を保つか否かを問題とした。實驗の裝置及び一般的方法の詳細については前實驗を參照せられ度い。

**色彩刺戟による實驗** 五十種の色紙(赤系統九、橙系統七、黄系統五、綠系統七、青綠系統九、青系統三、紫系統七、灰系統三)を以て刺戟系列を作り、之等を一個づつ繼時的に中性灰の衝立の中央にある六纏平方の露出孔から約四秒間呈示し、觀察者をしてその快不快を $+3$ から $-3$ までの符號を用ひて判斷せしめた。刺戟呈示の順序は出鱈目に決定したが、一度決定した順序は終始一貫して變へなかつた。

實驗は暗室内に於てマツダ晝光燭の照明下に、一實驗時に三回繰返へして行はれた。一實驗時中の系列間の時間的間隔は約十分、一實驗時と次の實驗時との間隔は一週間とした。觀察者は三名、中HとTは五實驗時、Kは四實驗時の實驗に參

加した。各實驗時に於ける第一系列は觀察者の心構へを確立する爲の豫備實驗として結果の考察から省いた。

音刺戟による實驗 刺戟系列としては、前實驗の七十八種の複合音全部を用ひた。實驗の手順は大體色彩の場合に準ずる。只、一實驗時と次の實驗時との間隔を一晝夜としただけが主なる相違である。觀察者は三名(KとTの他にMがHに代る)すべて四實驗時の實驗に参加した。前と同様に各實驗時の最初の系列は豫備實驗として結果の考察から省略した。

### 實驗の結果

第一に結果の概觀を得ようとして、觀察者別に、各實驗系列に於ける各刺戟の得點の平均をとり、更に之等を合計してその平均と平均錯差を算出した。平均錯差の値は、色彩刺戟の場合、觀察者Hに於て0.二三、Kに於て0.一五、Tに於て0.一二であり、音刺戟の場合、Kに於て0.三〇、Mに於て0.一〇、Tに於て0.一八であつた。即ち平均錯差は最高0.三〇から最低0.一〇間にある譯で、本實驗に使用した判断の尺度(1—3)から見るとその一單位の一割乃至三割に過ぎないのであるから、全



體として各系列間の感情判断の動搖は少いといつて差支へなからう。

第二に、如何なる觀察者に於ても、同一の刺戟に對して同一の判断が全實驗系列

表 I 各實驗系列間に於ける判断の一致度 (色彩刺戟)

觀察者	實驗系列	1:2	2:3	3:4	4:5	5:6	6:7	7:8	8:9	9:10	平均	
	間隔時間	10分	7日	10分	7日	10分	7日	10分	7日	10分		
H	同一判断	實數	31	27	32	34	37	35	34	31	29	32
		%	62	54	64	68	74	70	68	62	58	64
	同一符號	實數	44	40	43	45	47	41	43	41	40	43
		%	88	80	86	90	94	82	86	82	80	86
K	同一判断		33	26	36	27	37	38	38	—	—	34
			66	52	72	54	74	76	76	—	—	68
	同一符號		41	42	48	38	47	48	45	—	—	44
			82	84	96	76	94	96	90	—	—	88
T	同一判断		23	26	29	19	29	30	32	32	35	28
			46	52	58	38	58	60	64	64	70	56
	同一符號		35	36	38	32	38	41	41	40	43	39
			70	72	76	64	76	82	82	80	86	78

を通じて與へられた例は極めて罕であつた。併し、表 I 及び II の内容を吟味すれば、一つの實驗系列と次の系列との間の判断の一致度は必ずしも低いとはいへないやうである。

表 I 及び II は同一刺戟に對する同一判断の頻數を觀察者別に示したものである。表に於て「實驗系列」の列には 1:2、2:3、… 等比較せらる可き系列の番號、時間間隔の列には之等系列

表Ⅱ 各実験系列間に於ける判断の一致(音刺戟)

観察者	実験系列	1:2	2:3	3:4	4:5	5:6	6:7	7:8	平均	
	間隔時間	10分	1日	10分	1日	10分	1日	10分		
K	同一判断	實數	28	22	32	22	23	22	29	25
		%	36	28	41	28	29	28	37	32
	同一符號	實數	45	47	48	43	42	44	47	45
		%	58	60	62	55	54	56	60	58
M	同一判断	實數	39	42	31	37	49	36	37	39
		%	50	54	40	47	63	46	47	50
	同一符號	實數	60	60	59	63	66	64	57	61
		%	77	77	76	81	85	82	73	78
T	同一判断	實數	42	34	39	40	47	34	49	41
		%	54	44	50	51	60	44	63	53
	同一符號	實數	63	60	60	59	67	49	63	60
		%	81	77	77	76	86	63	81	77

間の間隔時間が記されてゐる。而して、各観察者の欄に於ける「同一判断」の列にて上位の數字はそれ〴〵「同一判断」の實數、下位の數字はその百分比を、また「同一符號」の列にて上位の數字は同一符號の判断の實數、下位の數字はその百分比を表はしてゐる。

表について主なる點を擧ぐ

れば、五十の色彩刺戟の中(表Ⅰ)、Hは平均三十二(六四%)、Kは三十四(六八%)、Tは二十八(五六%)に、また七十八の音刺戟の中(表Ⅱ)、Kは平均二十五(三二%)、Mは三十九(五〇%)、Tは四十一(五三%)に對して同一の判断を下してゐる。數値を度外に置いて單に十一等の符號のみについて見れば、色の場合、Hは平均四十三(八三%)、Kは四十四

(八八%)、Tは三十九(七八%)に、また音の場合、Kは四十五(五八%)、Mは六十一(七八%)、Tは六十(七七%)に對して同一符號の判斷を下してゐる。同一判斷及び同一符號の判斷について全觀察者の平均の平均をとつて見ると前者は色に於て六三%、平均錯差四%となり、音に於て四五%、平均錯差九%、後者は色に於て八三%、平均錯差三%、音に於て七一%、平均錯差九%となるから、本實驗に於ける感情判斷は比較的恒常である。但し、色彩刺戟に對する感情判斷の方が音刺戟に對するそれよりも恒常度高く且個人差も少いといふ事が出来る。

第三に、全實驗系列に於ける各刺戟の感情値の平均と平均錯差との關係を觀察者別に調べて見よう。表Ⅲは異なる感情値に對する平均錯差の分布状態を表はすものである。例へば、H列にて(一〇)——(一一)の直ぐ下の數字0.52は、觀察者Hに於て—2から—1までの間の平均感情値を得た色彩刺戟の各々について算出した平均錯差の平均であり、同列最右端の數字0.44は之等平均錯差の總平均である。この場合、總平均は色彩刺戟の時、H 0.44、K 0.48、T 0.60、音刺戟の時、K 0.78、M 0.52、T 0.66となる。而してその最高値、Kの0.78をとつて見るも全尺度(+3———3)の $\frac{1}{8}$ に満たない、即ち此處に

表Ⅱ 平均錯差の分布

平均感情値		(-3) (-2)	(-2) (-1)	(-1) (0)	(0) (+1)	(+1) (+2)	(+2) (+3)	平均
H	色	—	0.52	0.54	0.59	0.35	0.30	0.44
M	音	0.50	0.55	0.82	0.67	0.41	0.38	0.52
K	色	0.37	0.38	0.96	0.62	0.36	0.30	0.48
	音	0.49	0.54	0.93	0.88	0.79	0.41	0.78
T	色	0.54	0.51	0.80	0.74	0.49	0.17	0.60
	音	0.43	0.50	0.98	0.80	0.55	0.32	0.66

場の構造と感情

於ても判断は多少動搖するとしても、平均して相當恒常であると見られる。

次に錯差の分布状態は如何といふに、平均感情値 (一) — (〇) 及び (〇) — (十) の間に於ては平均錯差の値最も高く、+3 或は -3 に近づくに従て漸次減少する傾向を示してゐる。其處で若し平均錯差の大小が真に判断の動搖度を現はすものとすれば、感情値 0 に近き刺戟に對する判断は一般に動搖し易く、之に反して最も快或は最も不快な刺戟に對する判断は恒常度が高いといはねばならない。Young も嗅刺戟によつて同様な實驗を爲し、同様な結果を得、全く等しい結論に到達した。併し、氏は後に Beebe-Center の説に従てこの結論の妥當性を否定してゐる。即ち、吾々の如き絶対判断法による實驗に於ては、判断

は $+3$ から $-3$ までの範圍に限られてゐるから、若し一つの刺戟に對して與へられた幾つかの判斷を平均するならば、その平均値とそれが持つ事の出来る最高の錯差量とは相互に關係してゐるのである。例へば、平均値が $+3$ 或は $-3$ となるには平均錯差は $\pm 0$ でなくてはならず、また、平均値が $0$ なる時、最高の錯差量は $\pm 3$ である。かくの如く、各々の平均値は一定値以上の平均錯差を持つ事は出来ない。今各々の平均値に對する最高の平均錯差(絶對値)を曲線にて表はすならば、平均値 $0$ に對する平均錯差を頂點とし、漸次 $+3$ 及び $-3$ の方向に傾斜して行く山形をなすのであらう。されば、平均値 $0$ 附近の錯差量が $+3$ 或は $-3$ 附近の錯差量より大きかつたといふ事は、必ずしもその判斷の恒常度の比較的低い事を意味しないといふのが *Yonung* や *Beebe-Center* の論旨である。筆者も亦、この議論の正當なるを認め、目下かゝる統計上の陥穽を避け得るやうな實驗を計畫中である。

以上、考察したる處を概括すれば次の様になる。

一、同一の刺戟系列を一定の時間的間隔(色彩刺戟は十分乃至一週間、音刺戟は十分乃至一晝夜)を置いて繰返へし呈示したる場合、その各々に對する絶對感情判斷

は比較的恒常である。

二、色彩刺戟に對する判断は音刺戟に對する判断よりも一般に恒常度が高い。但し個人によつて恒常度に多少の差を認める事が出来る(此の事實は恒常度と練習との間に積極的相關々係のある事を暗示する)。

三、感情値(絶對値)高き刺戟に對する判断は低き刺戟に對するそれよりも恒常度高き傾向を示してゐるが、此點は再吟味の必要がある。

註

(一) 此處に前實驗の信頼性が疑問となるかも知れないが、判断の動搖が常に一定の方向に傾いてゐた事及び全觀察者を通じて一つの例外もなかつた事は結果の妥當性を支持すると思ふ。

(二) P. T. Young, *J. Exper. Psychol.*; 6, 1923, 182.

(三) P. T. Young, *Amer. J. Psychol.*, 40, 1928, 399.

(四) 此議論によつて前述の感情判断の恒常性を否定する事は出来ない。何者この實驗に於て得た平均錯差は各平均に對する最高平均錯差より遙に少いからである。